

みていないこと

小野澤繁雄

眼の前にあっても、みていないということはある。

子どもの頃、水屋や流しは裏庭につながっていたから通路でもあって、手足を汚してもどつてきたときなど、水屋の屋根の下井戸端で洗って、そのまま流しから上がっていた。

しもやけがひどかった頃は、洗面器に張ったお湯に手をひたしてもんでもらうようなことをしたのも水屋だった。

餡こづくりを手つだったり、せいろでお焼きを焼くようなこともした。遊びの感じもしていたよ
うだ。

それでも、母のすることをしつかりとはみていなかったようだ。

後年になって、今のEテレの料理番組で、根菜類は水から茹でること、土のなかでできるものは水から、というのを聞いて、あれそうだったつけ、と思うことがあった。

さつま芋をふかすときなど、水からでよかったかなと迷う。とうもろこしでもなやむ（こちらは
お湯からだ）。そんなことのあとのことだ。

今の団地の家は真ん中に風呂や洗面所、やトイレがあつて、窓に面していないぶん、とくに風呂、トイレはかびやすい。換気扇もあるが、十分にはふせげない。

あるとき気付いて、ドアを少し開けておくようにしたところ、湿気が残らず、いいようだった。それでも、すでに過ぎてしまった時間がある。このことを、主婦でもある同僚に云ったら、その人は新築の（家の）最初からそうしていると云う。

図書館員の仕事がなく、前半では、カードを繰るようなことが多かったから、指先の腹はいつの間にかつるつるになっていた。そんなことで、紙を捲るのが苦手だ。新札でなくてもうまく数えられず、レジで余計に出してしまったこともある。

スーパーでは、ビニール袋の口があげられず、これはやっさいきんになって袋詰めのコナーにあるテープを少し指にとって使うようにしてみた。これはいい、と思ったので、これもあるとき口にしたら、湿った布巾が置いてあるでしょ、と言われた。たしかに折りたたんだものが置いてある。みていなかったのだ。